

## リコーダーを使ってふしづくりに挑戦しよう

音楽 第3学年

珠洲市立若山小学校・教諭

### 1 事例の概要

本校では、今年度「確かな学びの力を持った子の育成」という主題を設定し、研究を進めている。音楽科においては、楽しい音楽活動を通して音楽に対する豊かな感性と基礎的な能力を育みたいと考えた。中学年では、楽譜と音との関連を意識した学習や、感覚的なものに知的なものを加味した音楽体験を通し、音楽活動への意欲がさらに高まるようにしていかなければならない。

この4月に出会った本校の3年生17名には、全員が自分の声をしっかりと出したり、だれとでも手遊び歌を楽しんだりするなど、音楽を楽しもうとする雰囲気十分に備わっているように思われた。そこで、「45分間ですべて『音楽』を感じ取れる時間であり、音楽的な雰囲気がとぎれない授業」、「みんながいるからこそ楽しいという思いを子どもたちがもてる授業」、「子どもたちのこれからの音楽活動のヒントになる種がまかれる授業」をめざしたいと考えた。

本事例は、子どもたちがこれまで培ってきた感性を基盤として、自分自身の音楽をつくりだそうとする活動を、「音楽遊び」の感覚で取り入れた実践である。

### 2 実践内容

#### (1) 題材の目標

リコーダーの音色に関心をもって聴いたり、基本的な奏法を身につけたりすることができるようにする。

#### (2) 指導上の工夫点（視点）

##### ① 生き生きと表現させる工夫

ふしづくりの土台となる曲として、「子どもたちがリコーダーでふけるようになった2音（ラとシ）だけでできたリズムの簡単な曲」、「子どもたちにあまりなじみのない曲」という二つの視点から「にじ色の風船」（里山 萌 作曲）を教材曲として選び、最後2小節のふしづくりに取り組むことにした。なじみのない曲のほうが、本来の旋律から離れて自由に表現できると考えたからである。また、短時間に全員があまり抵抗を感じることなく発表できるよう、4～5人のグループ内で発表させることにした。

##### ② 指導法の工夫

「つくって表現」のための「つくる」方法を、指導者サイドから具体的に示すことにした。「つくる」方法としては、もとになる曲の音、リズム、速度、強弱などを変化させることが考えられるが、児童の実態とリコーダーという楽器の特性を考え、「音を変える」ことを基本に、発展として、「リズムも変えてもよい」と付け加えた。また、前教材「海風きって」（高木あきこ 作詞・石桁冬樹 作曲）の鍵盤ハーモニカでのふしづくりで、教科書に示されていた手法（具体的に階名が書いてあり、自分の選んだ音を線で結んでいく）を、本時も使うことにした。

##### ③ 意欲を高める工夫

用いる音がわずか2音なので、「つくる」というより「えらぶ」という感じとなり、機械的なものになりがちである。そこで、風船のペープサートを用意し、揺らすことによって風船の動きをイメージさせ、それを旋律に結び付けて考えられるようにした。

##### ④ 評価の工夫

ワークシートを使って子どもたちが視覚でも旋律の流れをとらえられるように工夫し、指導

者のほうも児童の活動の様子をすぐにつかめるようにした。また、児童が自分のふしづくりについて、短時間で自己評価できるようにした。授業の中では、一人一人の児童に向き合って、リコーダーの音色や演奏の様子をつかみ指導できるよう、「マンツーマン」になる時間を設定した。また、前時の評価をもとに、本時のAと判断するキーワード、Cと判断される児童への支援の方法を前もって考えておいた。

**B-1 ワークシート**

**B-2 意欲を高める工夫**

### 3 指導の実際

児童の活動と意識の流れ	支援（☆）と評価（◎）
<p>4. 最後の2小節のふしをつくってみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どんなふしになるのかな。</li> <li>・先生のはシシシシ   シーになるよ。</li> <li>・ぼくのは、ジグザグに動くよ。</li> <li>・かみなりにあたって下へ行ったよ。</li> <li>・ふわふわの感じ。こんなふしになったよ。</li> <li>・みんなに聞いてもらいたいな。</li> </ul>	<p>☆例を示して説明する。（ペープサート） 先生のは、すうっと真横にとんでいったよ。</p> <p>☆活動の様子を見て回る。</p> <p>◎&lt;表&gt;シとラの2音を使ってふしづくりをしている。（観察）</p> <p>☆グループの人に聞いてもらおう。いっしょにふいて、最後2小節は、ふしをつかった人がソロで演奏するとすてきだね。</p>

**C-1 指導案**

**C-2 児童のワークシート**

### 4 成果と課題

#### (1) 生き生きと表現させる工夫

子どもたちは、初めての曲なのに階名を読み取ってすぐにリコーダーで演奏できることにとても自信を持ち、最後2小節のふしづくりに楽しみながら取り組んだ。グループ内での発表もだれかに聞いてもらいたいという思いが自然に生まれ、生き生きとした表情で発表していた。

#### (2) 指導法の工夫

「つくる」方法を具体的に示すことにより、子どもたちは、「つくる」活動に無理なく入ることができたが、ワークシートに

◎ ◎ ◎ ◎ | ◎ と2つの音をマークしている児童が2～3人いた。どちらかの音を選  
 ◎ ◎ ◎ ◎ | ぶように指示したが、後で、八分音符で2音とも演奏するつもりだった

たのかもしれないと思った。児童の思いをよく聞いたり、どのようになるか実際に演奏してみたりするなど、発展的に取り上げるべきだったと思う。

#### (3) 意欲を高める工夫

旋律を風船の動きに結びつけたことで、「ふわふわと」「ジグザグに」など、一人一人の思いやイメージを旋律の流れに生かすことができたと思う。

#### (4) 評価の工夫

ワークシートは、指導者も即座に児童の活動を見取って支援することができ、また、児童も互いのふしを見合い、その良さに気付くことができ、有効であった。「マンツーマン」の時間は特に技能を身につける場面において必要だと思うが、同時にまた、その間の他の子どもたちの言葉や反応をどう見取り、これからの音楽活動につなげていくかが、今後の課題である。「自分の音楽」をつくり出したという喜びは、何度でも演奏してみんなに聴いてもらいたいという意欲となり、もっと美しい音色で演奏したいという願いから、子どもたちは基本的な奏法を見直す必要性にも気づく。このように、子どもたちの音楽性は、らせん状に高まっていくものなのかもしれないと感じている。